さんたブルース

よぞ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さんたブルース

【Ｎコード】
Ｎ１９８７Ａ

【作者名】
よぞ

【あらすじ】
別居中の妻から離婚届が届いたクリスマスイブ。ふらふらと外を歩いていた時に俺と三太は出会った。遠く離れた恋人のために、ただ純粋な想いとプレゼントだけを持って家を出てきた三太を見て、俺は何を思うのか。

1

気に入らない。
普段宗教なんて関係ない奴らがクリスマスだなんだって街を飾り付けてやがる。店頭には間に合わせのクリスマスソングが溢れている。本当は誰もキリストの誕生なんて祝う気もないくせに。
「どうせ形だけ、さ」
そう呟いてみて少し笑う。なんだ、俺と似たようなもんか。
クリスマスイブの夜、俺はイルミネーションで飾られた街の中を一人歩いていた。赤い衣装に身を包んでいるサンタ達や、生意気に高そうな服をつけている若い奴らの中で、俺の野暮ったいコートはどうにも景色に馴染んでいないように見える。
もう一ヶ月も前になるが、妻が娘を連れて出て行った。四十手前で無職になった俺に愛想を尽かしたのか、他に男でもできたのか。……両方かもな。
そしてついに今朝方、離婚届が入った封筒が俺のアパートに届いた。妻の名前や判はもちろん、俺の記入する場所さえも綺麗な字で埋めてあった。後は判子を押すだけです。凛としたあいつの声が聞こえてきそうな離婚届だった。そして判子片手に半日以上それと向き合った俺は、その重圧に耐え切れなくなって外に出てきてしまったのだ。
「情けねぇな」
すれ違いざまに若い男がそう言った。俺は驚いて振り返る。しかしそこには恋人と楽しそうに話をしている幸せそうな男の姿しかなかった。
俺にも、あんな頃があったのかね……。
思い出そうとしても、思い出すには辛い時間が多すぎた。
これ以上街中にいても気持ちが沈むだけだと思い、裏路地へ足を運ぶ。街のイルミネーションの明かりも、クリスマスソングも、嘘

のようになくなった。コツンコツンと革靴の音が反響する。クリスマスなのに、いや、クリスマスだからか、小さな個人店はどこもシャッターが下りていて、辺りは不気味にも思えるほど静かだった。
「あの、すいません」
突然、壁が俺に話しかけてきた。
「中央中学って、どの辺ですか？」
暗がりから少年が出てきた。考え事をしながら歩いていたので少年の存在に気づいていなかったようだ。黒いジャンパーを着けていたので余計に気がつかなかった。
「……そこら辺に交番あるだろ」
知らないわけではなかった。中央中学は俺の母校だ。
「あ、いや……知らないなら別に。ありがとうございました」
少年はぎこちない様子で歩いて行く。よく見ると手には紙袋を持っている。荷物はそれだけのようだった。中央中学といえばこの近所だし、それを知らないということはあの少年は地元の人間ではないのだろう。見たところまだ中学生、家出かもしれない。
風が吹き始めた。体がこれ以上冷えないように襟元をきちんと閉める。他人の心配してやるほど立派な大人じゃないんでね。俺は少年とは反対方向に歩きだした。
「……っゅん」
背中越しに少年のくしゃみが聞こえた。そういえば家を出る前に見ていた天気予報では朝方にかけて雪が降ると言っていた。しかし俺には関係ない。
「……はぁ」
ため息も凍りつきそうなほど寒かった。しかし俺にはこじんまりとしててもちゃんと雨風を防いでくれる暖かいアパートがある。
「……っぶ」
転んだ。しかもマンホールの鉄の蓋に鼻を打った。地面は思っていた以上に冷たかった。野宿なんてしたら死んでしまうかもしれない。しかし俺には……。

「……おい少年」
起き上がり振り替える。
少年は二十メートルほど離れたところで歩いていた。俺の言葉は聞こえていない様子だ。俺の心変わりのチャンスを逃すとは。やっぱりほっとこうか。
「……おい、少年！」
「はい……？」
普段なら家出少年なんて見つけても気にもとめないだろう。俺もクリスマスで少し浮かれているのかもしれない。
「キリストさんに感謝しろよ」
少年は状況がわからないといった感じで俺を見ていた。そりゃそうだろう。つい先ほど道を尋ねたオヤジが鼻から血を出して格好つけて立ってたら、誰だってあんな表情になる。

2

部屋に帰って暖房のスイッチを入れる。ほんの少し外に出ていただけなのに部屋の中はかなり冷え込んでいた。

「お邪魔します……」

おずおずと部屋に入ってきたその子に毛布をかけてやる。何時間も外にいただけあって、体はかなり冷え込んでいるようだ。

まったく、見ず知らずの子を拾ってくるなんてどうかしてる。

ぶつぶつ言いながらもその子に暖かい紅茶でも飲ませてやろうとキッチンに向かう。

「確か紅茶はこの戸棚に……あれ」

足元の戸棚や頭上の戸棚、冷蔵庫の中なども見てみるがどこにも紅茶のパックがない。この辺にあると思ってたんだけど。いつも人任せにしていたのが良くなかったのか。独りになると紅茶も入れられないなんて。

「あの、おかまないなく」

「子供が遠慮しない」

くそう。仕方なく紅茶をあきらめて冷蔵庫に入っていたインスタントのコーンスープを作る。それをピンク色のマグカップに入れて持っていく。あいつが大事にしていたマグカップだ。顔に似合わないとはこういうことを言うんだなと思う。

「はい。熱いから気をつけて」

「ありがとうございます」

湯気だったコーンスープを机の上に置いてやる。

「それにしたって、何でそんな紙袋ひとつで？」

その子が家の中に入ってからも大事そうに抱えている紙袋を指さして言う。よほど大事なものなのだろう。

「これ、クリスマスプレゼントなんです」

そう言って嬉しそうに笑った。ふむ、可愛い笑顔だ。

「中身は？」
「手編みの、マフラー……」
そりゃまた乙女チックな選択をしたものだと思う。最近の若い子達の中ではレトロブームなのだろうか。
「相手は？」
「去年まで同じクラスだった男の子で……三太くんって子です」
うつむいて顔を赤らめているその子を見ると、こっちまで恥ずかしくなってくる。私にもこんな時代があった……のかもしれない。記憶にないが。
「お姉さんは独り暮らしなんですか？」
部屋を興味深げに眺めていた女の子は私を見て言った。なるほど、中学生の女の子から見ると私はお姉さんか。
「違うよ。本当は三人家族なんだけど、今はバカな男とは別居中で女の二人暮し」
私はリビングの端に掛かったホワイトボードを指さして言った。今日は友達と外で遊んでくるね、智子。と書かれている。人の気も知らないでいい気なものだ。
この女の子と出会ったのはほんの三十分前のこと。独りきりのクリスマスを過ごすため、コンビニにお酒を買いに行く途中で道を尋ねられたのだ。時間もかなり遅かったので事情を尋ねたところ、なんと二県も向こうからやって来たと言う。時間も時間で終電もないし、まさかこの寒空の中で野宿させるわけにもいかず、かといって警察に引き渡すのも大事過ぎる気がする。と、いうわけでとりあえず自宅に連れてきたのだ。
「とにかく、明日になったら君の実家まで連れて行くから」
「あの、三太君にこれだけ渡したいんですけど……」
相変わらず放さない紙袋の事だ。そりゃ中学生がこんな遠くまで一人で来るなんてよほどの決心が必要だっただろう。それだけ大事なものなのだ。明日、その子の家まで送る前にそれぐらいはしてあげてもいいかもしれない。

「わかった。それ渡したら帰るのよ」
「はいっ」
やれやれ、こんなに可愛い笑顔を独り占めするなんて。まだ見ぬ三太君はよほどいい男なのだろう。どこかのバカ男に爪の垢を五リットルぐらい飲ませてやりたい。
「……ねえそういえば、あなた名前なんていうの？」
単純なことを聞き忘れていた。
「私は……」

2（後書き）

何か書かなきゃ、そんな思いで焦って執筆開始。
でも夏なのに冬の話ばかり書くのはやはり現実逃避なのでしょうか
（＾＾；
初の連載、頑張りますんでどうぞよろしく。

3

「衣って子です」
キヌ？　そりゃまた随分と古い名前の女の子だ。
俺は少年と中央中学に来ていた。照明の落ちた夜のグラウンドは暗く、強い風が木々をざわめかせていた。遠くで空き缶がカラカラ転がる音がする。
事情を聞くと、少年は衣ちゃんにクリスマスプレゼントを渡しに来たのだそうだ。
「中学二年にあがった時、衣ちゃんは両親の都合でこっちに引っ越したんです。それからも手紙で何回かはやり取りしてるんですけど、もう半年も顔を見てなくて」
中学生のくせに遠距離恋愛でしかもペンパルなんてレトロな奴だ。携帯電話も持っていないらしい。最近の子は小学生でも持っているとニュースで言ってたが、当てにならないもんだな。
缶コーヒーを飲む。冷え切った体にカフェインが流れ込んで気持ちいい。吐く息は白く凍りついている。
半年も顔を見ていなくて、か。俺もあいつの顔を一ヶ月見てないな。
「で、その子が転校した学校の名前以外何も知らないでこっちに来たと」
「……はい」
「無計画な奴だな」
とにかく、これからどうしたものだろうか。本当なら中央中学まで案内して終わりのつもりだったが、こいつはどうやら衣って女の子を捜し続けるらしい。ま、独りでうろついてたってどうせ補導されて家に帰されるのがオチだろうが。
「お前、名前は？」
「三太です」

サンタ、か。クリスマスだからって大きくでやがったな。
「もう一度聞くぞ。名前は？」
「三太、です」
なるほど、どうやら俺の優しさは巨大なお世話だったらしい。たまに人に親切してもろくな事がない。もう二度と家出少年には関わらないようにしよう。俺は立ち上がり、家に帰ることにした。
「そうか、サンタ。今日は忙しいだろう。なんたってクリスマスイブだしな。邪魔して悪かった。衣ちゃんによろしく」
空き缶をグラウンドに投げ捨て、俺は歩き出した。その足にサンタがしがみついてくる。
「待ってください！　ここで見捨てられたら僕は、僕は……」
ふん、知ったことか。本名も名乗らないような失礼なガキにこれ以上付き合ってられん。俺は家に帰って離婚届とにらみ合うという大事な使命があるのだ。
グッ。足を動かそうとする。しかしまるで石にでもしがみつかれたかのようにその場を動かない。ぬぅ、元柔道部をなめるな！
ググッ。懇親の力を込めて右足を前に突き出す。しかし動かない。
「ふんぐぁ……サンタぁ……離せぇ……！」
「見捨てないでぇ……！」
恐るべし、サンタクロース。伊達に世界中を走り回っていないというわけか。しばらくの硬直状態。さっき投げた空き缶がカラカラと音を立て風に遊ばれている。勝負は一瞬。風が止んだ、今だ！
「ふぐあっ！！」
思い切り振り切った右足から、靴が空高く舞い上がった。同時に勢いをつけすぎた俺の体は宙に舞い、そのまま地面に叩きつけられた。さらに悪いことに、風で舞い戻って来ていた空き缶に後頭部を打った。まるで全てがあらかじめ用意されていたかのような、素晴らしく不幸な出来事だった。
動かなくなった俺の顔を、三太が心配そうに覗き込んでいる。時間差で舞い上がった靴が俺の腹部に落ちてきた。

「大丈夫、ですか……？」
ああ、妻と出逢った頃に読んだ小説の内容がやっとわかった。
これが殺意といふものか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1987a/

さんたブルース

2010年10月20日17時20分発行